

コミュニケーション・スキルに関する諸因子の 階層構造への統合の試み

藤 本 学

久留米大学文学部

大 坊 郁 夫

大阪大学大学院人間科学研究科

コミュニケーション・スキルに関する諸因子を階層構造に統合することを試みた。既存の尺度を構成する因子を分類することで、自己統制・表現力・解読力・自己主張・他者受容・関係調整の6カテゴリーが得られた。これらの6因子は理論的に基本スキルと対人スキル、また、表出系、反応系、管理系に分類された。こうしてコミュニケーション・スキルの諸因子を階層構造に統合したものがENDCOREモデルであり、各スキルに4種類の下位概念を仮定した24項目の尺度が、ENDCOREsである。

キーワード：ENDCOREモデル、コミュニケーション・スキル、階層構造、尺度の開発

問題と目的

スキル概念の多義性

コミュニケーションを円滑に行うために必要となるのが、コミュニケーション・スキルである。しかしながら、コミュニケーションは幅広い領域で研究が行われており、その定義は多岐にわたっている(e.g., 塚本, 1985)。そのため、コミュニケーション・スキルの定義は、ソーシャル・スキルと概念上の重複が見られるなど一意ではない。例えば異なる文化や社会への交流・適応を研究対象とする異文化コミュニケーション学では、スキルは人間関係のルールを実行する能力を意味しており(e.g., Gudykunst & Kim, 2003), 先方に特有の文化に適応するための戦略という意味合いが強い。戦略は、その社会に適応するために「どのように振る舞うべきか」という行動規範に関する知識を含む、状況に特有の能力ということになる。一方、社会心理学では、対人関係を円滑に運ぶために役立つ能力を指して、スキルという用語が使われることが多い(菊池, 1988)。

したがって、個々の状況において適切な対人関係を形成・維持するための社会的な能力、すなわち狭義のソーシャル・スキルということになる。これらに対して、言語・非言語による直接的コミュニケーションを扱う社会言語学では、スキルを話し手や聞き手としての能力として扱っている(e.g., Wiemann, 1977; Rubin & Martin, 1994)。

一般に用いられるコミュニケーション・スキルやソーシャル・スキルという言葉は、これらの定義を包括、もしくは無分別に指していることが多い。本論では混乱を避けるために、このような包括的な能力を指す場合には、単に“スキル”という用語を用いることにする。

スキルの階層レベル

スキルは欧米において研究が進められてきた。その中で作成された尺度は、白人を中心とした欧米文化を基準としたものである。このような研究動向の中で、Takai & Ota (1994) は日本文化に特有な対人コンピテンスとして、「察知能力」「自己抑制」「曖昧さ耐性」「上下関係管理」「対人感受性」を抽出している。欧米で開発されたスキル尺

度には、日本人に特有とされるこれらの因子は含まれていない。また、毛・大坊 (2005) は中国に特有のコンピテンスとして「相手への面子」「社交性」「友人への奉仕」「功利主義」を、日本に特有のコンピテンスとして「思いやり」「社交性」「つきあい」「主張性」をそれぞれ同定している。日中の因子を比較すると、共通する因子と文化特有の因子があることが分かる。先行研究 (堀毛, 1994b; 高井, 1994) でも、スキルは文化に共通する側面と文化に特有な側面により構成されていることが指摘されている。このように自由記述からボトムアップに抽出された因子には性質の異なるスキルが混在している。これらのコンピテンスに関する因子のうち、文化共通の因子をソーシャル・スキル、文化特有の因子をその文化に適應するために必要な戦略として区分することができよう。これら対人関係能力としてのソーシャル・スキルと社会適應力である戦略は、次元の異なる概念として捉えられている (Trower, 1982; 和田, 1992)。例えば後藤・大坊 (2003) は、スキルを基本的スキル、仕分けの仕

方、応用的スキルの3階層からなる逆三角形モデルによって説明している。このモデルにおける基本的スキルにはコミュニケーション・スキルからソーシャル・スキルにわたる能力全般が含まれ、状況に応じた対処方略である仕分けの仕方とその活用能力である応用的スキルが戦略に該当すると考えられる。

本研究では、スキルという多義的な概念を、文化・社会への適應において必要な能力である戦略、対人関係に主眼がおかれた社会性に関わる能力であるソーシャル・スキル、言語・非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力であるコミュニケーション・スキルの3種類に分類する。そしてこれらは、個人の能力から社会適應のための戦略にわたる状況や行動のレベルの違いにより (Figure 1 縦軸)、コミュニケーション・スキルを基礎とし、その上位にソーシャル・スキル、さらに上位に戦略が位置する階層構造に関連付けることができる。またこれらのスキルは、そのレベルに応じて、文化や社会に共通する汎用的な能力かそれとも特有の状

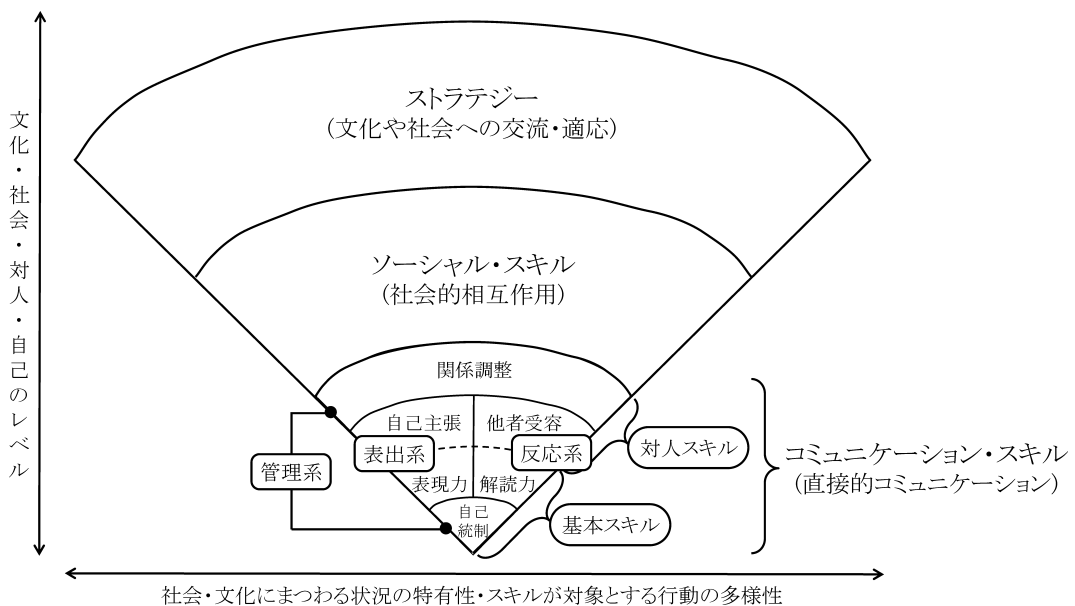


Figure 1 スキルを階層構造として捉えた“スキルの扇”

況に対する具体的な能力かという多様性の違いがある (Figure 1 横軸)。

スキルの多因子構造

スキルに関する既存の定義は、研究領域や研究者の視点が異なるだけでいずれも誤りとはいえない。したがって、多様な定義を取捨選択するのではなく、既存の定義、またそれを基に開発された尺度を包括する定義を求めるのが合理的であろう。Trower (1982) やそれを受けた相川 (2000) は、対人行動場面での一連のプロセスとして各スキルを関連付けており、更に相川 (2000) はその中のプロセスのひとつである対人反応を階層構造であるとしている。本研究のねらいはこのような階層関係という考え方を徹底し、多様なスキルを1つの構造に統合し、体系化しようとするものである。

菊池 (1988) の KiSS18 のように、ソーシャル・スキルの総合力を測定する実用的な尺度もあるが、多くの尺度がスキルを多因子構造として捉えている。例えば、KiSS18 の元になった Goldstein, Sprafkin, Gershaw, & Klein (1986) のスキル尺度は、会話に関する初歩的なスキルから社会的適応行動に関するスキルまで幅広いスキルを含んでいる。また、Riggio (1986) は情緒・社会の両側面において、統制性・表現性・感受性に関する因子を抽出している。このように、これまで既存の尺度によって多様な因子が特定されているが、多くの因子が概念的に重複している。例えば記号化や解読といった因子は、基礎的なスキルとして多くの尺度に含まれている (e.g., Zuckerman & Larrance, 1979; Riggio, 1986; 堀毛, 1994a)。このように共通して抽出される因子があるものの、これらは必ずしもすべての尺度に含まれているというわけではない。一方で、尺度に特有の因子も多く存在する。その理由として、研究によってスキルという概念へのアプローチに違いが見られること、そして既存尺度が特定の目的を元に自由記述から尺度を作成しているため、抽出したスキルに偏りがあることなどが挙げられる。本研究は、これらの問

題を踏まえ、演繹的アプローチにより、先行研究により抽出された因子をそれらの関連性から階層構造として整理・統合する。さらに、この体系に基づく最大公約数的な汎用型尺度の開発を行う。

性格特性には Big 5 (Goldberg, 1992) という5因子構造が見出されている。同様にスキルも個人特性のひとつである以上、既存因子の欠損や重複を整理することにより、共通する構造を想定することは十分に可能であると考えられる。ただし、スキルは行動に関する特性であることから、その国の文化・風習・価値観などの影響を強く受けるものと考えられる。そこで本研究では、直接的コミュニケーションを円滑に行うために必要な話す・聞くといった文化や社会に共通する能力であるコミュニケーション・スキルに焦点を当てる。

諸因子の分類

コミュニケーション・スキルという概念を整理するために、数多くのスキル尺度を構成する因子 (Table 1) について、KJ 法の手続きにより第1著者と、社会心理学を専攻する院生である研究協力者が分類を行った。なお、分類で用いた既存尺度は、妥当性の検証のために本研究の調査においてすべて使用している。その結果、自己統制に関する因子、表現力に関する因子、解読力に関する因子、自己主張に関する因子、他者受容に関する因子、関係調整に関する因子という6種類のカテゴリーが得られた。共通するコミュニケーション・スキルの因子を階層構造として統合したモデルの名称については、表現力と自己主張に共通する EN-CODE・解読力と他者受容に共通する DECODE・自己統制の CONTROL・関係調整の REGULATION の頭文字を取り、ENDCORE モデルとした。

6 カテゴリーの関連性

スキルはストラテジー、ソーシャル・スキル、コミュニケーション・スキルからなる階層構造である (Figure 1)。さらに、その基礎であるコミュニケーション・スキルの内部構造も、得られたカテゴリーの通り、ソーシャル・スキルと近接した高

Table 1 6 カテゴリーに分類された既存のスキル尺度を構成する諸因子

尺度名	カテゴリー				
	自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容
PEA		記号化			関係調整
PDA			解読力		
ACT		非言語的表出性			
ENDE2	統 制	記号化	解 読		
SSI	情緒的コントロール		情緒的感受性	社会的表現性	社会的感受性
SSI 日本版	情緒的コントロール	情緒的表現性	情緒的感受性	社会的表現性	社会的感受性
ICQ				否定的主張	情緒的サポート
					関係開始 開 示 葛藤マネージメント
ICQ 日本版				拒 否	関係開始 関係維持 衝突回避
KISS18				社会的スキル	
JICS	自己統制 自己抑制 曖昧さ耐性	対人感受性	対人感受性 察知能力		自己抑制 曖昧さ耐性
					上下関係管理
RSMS	自己呈示変容能力	自己呈示変容能力	他者行動感受性	自己呈示変容能力	自己呈示変容能力

注. JICS と RSMS の因子の中には複数のカテゴリーに含まれているものがある。空白は該当する因子がないことを示す。

次の能力から、自己や意思疎通に関する基礎的な能力まで次元の異なる因子からなる。そこで、基本スキルと対人スキルという2つの階層を仮定した。基本と対人の階層性は、自己・対人・社会というように、コミュニケーション・スキルの対象の拡大を根拠としている。すなわち、自己は対人関係に含まれ（自己は対人関係を構成し）、対人関係は社会に含まれる（対人関係は社会を構成する）。ゆえに、コミュニケーション・スキルの対象も、自己を基盤とし、対人関係、社会へと拡大していく関係に位置づけることができる。

自己統制は自己抑制や統制などの既存因子が該当し、自己に方向付けられた因子である。また、表現力や解読力は、コミュニケーション行動の基礎となる言語的な能力である。これらの3因子が基本スキルを構成している。基本スキルは、統制、記号化、解読から構成されている堀毛 (1994a) が作成した ENDE2 と共通する構造である。

一方、自己主張と他者受容は、概念的な関連性から、表現力と解読力に対応する上位因子として位置づけた。また、関係調整は、集団内の人間関係およびコミュニケーションにはたらきかける能力である。この因子は、ソーシャル・スキルに最も近接し、円滑な社会的相互作用を行う上で土台となるスキルである。いずれも相手に対するはたらきかけである自己主張・他者受容・関係調整の3因子が、対人スキルを構成している。これら対人スキルは、基本スキルとソーシャル・スキルの間に位置付けられる。

以上の6因子のうち、表現力と自己主張、解読力と他者受容が、それぞれ概念的に関連したカテゴリーであると考えられるため、自己主張は表現力の上位カテゴリーとしてこれらを“表出系”、他者受容は解読力の上位カテゴリーとしてこれらを“反応系”とした。また、自分の内面と他者との関係という方向性の違いはあるものの、マネジメントという共通する行動特性を持つ自己統制と関係調整を“管理系”とした。3系列のうち、表

出系と反応系は概念的に対を成すと考えられる。また、他者を主体とする反応系と、自他を制御する管理系とは、他者を重視するために自らを抑え、また他者と協調することにより関係を良好にするというように互助的な関係にある。以上が、本研究が提案する階層構造を持った ENDCORE モデルである (Figure 1)。

ENDCORE の階層性と系列性は、各因子の質的な違いを反映している。基本スキルにおいて対をなす表現力と解読力は、情報の送受信に関する基礎的な能力である。これらに対応する自己主張と他者受容は、表現力や解読力といった基本的な言語能力ではなく、「できる－できない」という能力的側面に加え、コミュニケーションに関する指向性 (McCroskey & Richmond, 1996) を含んだ能力であると考えられる。管理系については、自己への働きかけである自己統制は、パーソナリティとしての側面がある一方で、向上するという能力的側面も併せ持っていることを考え合わせるとセルフという概念に近い能力ではないかと考えられる。一方、関係性への働きかけである関係調整は、能力的な側面とともに親和的な指向性を持っていることから、対人関係にはたらきかけるメタ行動に関する能力であると考えられる。このように ENDCORE モデルにおけるコミュニケーション・スキルは、能力と指向性から規定されることになる。

このモデルをスキル間の関連性として表すと¹⁾、基本スキルである3スキルのうち、対を成す表現力と解読力は言語能力を背景としたコミュニケーションに必須の能力である。一方、自己統制は円滑なコミュニケーションの下支えとなるセルフと関係の深い能力である。自己を統制する能力の高低が言語能力に影響するという因果関係は仮定できないため、これら3スキルは相関関係にあると考えられる。

1) パスモデルを分析した結果を図示したものが Figure 2 である。

対人スキルについては、自己主張と他者受容が属する系は反する指向性を有しているため、スキルとしては独立したものとして考えるべきであろう。残る関係調整は対人関係のコントロールに関するものであり、社会-自己のレベルにおいて最上位に位置づけることができる。円滑に関係を調整するためには、自分の意見を躊躇することなく相手に伝える能力とともに、相手の立場や考えを配慮する能力が必要となる。そのため、自己主張や他者受容と関係調整の間には因果関係があるものと仮定することができる。

さらに、モデルは系列間の階層関係を仮定しているため、表出系として表現力から自己主張、反応系として解読力から他者受容、管理系として自己統制から関係調整に、それぞれ階層的な因果関係を想定することができる。また、反応系と管理系の互助の関係については、一方の系統の基本スキルから他方の対人スキルへの因果関係として表現した。以上が ENDCORE モデルの因子間に想定される関連性である。

目 的

コミュニケーション・スキルを、言語能力からソーシャル・スキルと近似した対人能力にわたる6種類のスキルからなる複合概念として仮定し、これらのスキルを階層構造として統合した仮説モデルを立てた。以下では、演繹的に尺度を作成し、それを用いた調査から尺度の妥当性とモデルの構造について検証を行う。尺度とモデルの妥当性が確認されることで、その理論的根拠である ENDCORE の考え方の正当性を確認することができる。

方 法

サブスキルと質問項目の設定

既存因子を分類することで6種類のカテゴリーが得られている。これらのカテゴリーに関するスキルを測定する尺度を作成するために項目の選定を行った (Table 2)。まず6種類のスキルをメインスキルとした上で、それらを構成する4種類のサ

ブスキルを、KJ法のときに各カテゴリーに分類された既存因子などを参考に設定した。項目数については、同一カテゴリーに属した既存因子の多様性を活かすことと概念的重複を減らすことの兼ね合い、尺度全体の項目数を考慮した上で、得点の幅をそろえるために、各因子の項目数を4項目に統一した。

まず、基本スキルについては、自己統制の下位概念を、自律的行動に関する諸要素として“欲求抑制”、“感情統制”、“道徳観念”、“期待応諾”とした。つぎに情報の入力と出力に関する表現力と解読力は、チャンネルの違いに注目し“言語表現／理解”、“身体表現／理解”、“表情表現／理解”、“情緒伝達／感受”とした。

対人スキルのうち、主張性は支配・独立・有能と、反応性は共感・友好・親切・優しさとの関連が報告されている (e.g., Richmond & McCrosky, 1992; Rubin & Martin, 1994)。そこで、主張性と関連が深い自己主張は、社会的指向性として“支配性”と“独立性”、および説得に関する能力として“柔軟性”と“論理性”を取り上げた。反応性と関連した他者受容は、受容的態度と関連の深い“共感性”、“友好性”、“譲歩”、“他者尊重”を取り上げた。関係調整については、対人関係に対する指向性である“関係重視”、関係を良好な状態に保つ能力である“関係維持”に加え、関係を悪化させる意見対立と感情対立という異なる葛藤 (Simons & Peterson, 2000) への対処能力 (“意見対立対処”、“感情対立対処”) を取り上げた。

次に、これら24のサブスキルを表現する項目文を作成した。項目文はサブスキルの意味内容を表現する文章を第1著者が作成し、それを既存尺度の分類に参加した研究協力者との協議の上で修正するというプロセスにより確定した。修正プロセスでは、曖昧な表現で回答者の混乱を招かないように心がけた。また選択肢については、「する-しない」によって問われる頻度は置かれた状況により異なるという問題があり、「できる-できない」

Table 2 ENDCOREs および ENDCORE の項目

ENDCOREs		
メインスキル	サブスキル	項目文
自己統制	欲求抑制	1 自分の衝動や欲求を抑える
	感情統制	2 自分の感情をうまくコントロールする
	道徳観念	3 善悪の判断に基づいて正しい行動を選択する
	期待応諾	4 まわりの期待に応じた振る舞いをする
表現力	言語表現	5 自分の考えを言葉でうまく表現する
	身体表現	6 自分の気持ちをしぐさでうまく表現する
	表情表現	7 自分の気持ちを表情でうまく表現する
	情緒伝達	8 自分の感情や心理状態を正しく察してもらう
解読力	言語理解	9 相手の考えを発言から正しく読み取る
	身体理解	10 相手の気持ちをしぐさから正しく読み取る
	表情理解	11 相手の気持ちを表情から正しく読み取る
	情緒感受	12 相手の感情や心理状態を敏感に感じ取る
自己主張	支配性	13 会話の主導権を握って話を進める
	独立性	14 まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする
	柔軟性	15 納得させるために相手に柔軟に対応して話を進める
	論理性	16 自分の主張を論理的に筋道を立てて説明する
他者受容	共感性	17 相手の意見や立場に共感する
	友好性	18 友好的な態度で相手に接する
	譲歩	19 相手の意見をできるかぎり受け入れる
	他者尊重	20 相手の意見や立場を尊重する
関係調整	関係重視	21 人間関係を第一に考えて行動する
	関係維持	22 人間関係を良好な状態に維持するように心がける
	意見対立対処	23 意見の対立による不和に適切に対処する
	感情対立対処	24 感情的な対立による不和に適切に対処する

ENDCORE（簡易版）	
メインスキル	項目文
自己統制	1 自分の感情や行動をうまくコントロールする
表現力	2 自分の考えや気持ちをうまく表現する
解読力	3 相手の伝えたい考えや気持ちを正しく読み取る
自己主張	4 自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する
他者受容	5 相手を尊重して相手の意見や立場を理解する
関係調整	6 周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整する

によって問われる能力は社会的望ましさや無能感を喚起することになる。そこでこれらの問題を解決するために、能力そのものではなく、行動選択の抵抗感を評価する「得意－苦手」からなる選択肢を採用した。以上の手続きによるメインスキルの中に複数の項目がある尺度を ENDCOREs と名付けた（ENDCOREs の末尾の s は複数であることを表している）。併せて、他の尺度との併用や実験での使用、複数人に対する他者評定などで全体の

調査項目数が多くなったときなどのために、各メインスキルに直接対応した単項目からなる簡易版を作成した。この単項目尺度の名称は、複数項目からなる ENDCOREs と区別するために、単数形である ENDCORE とした。この ENDCORE の調査項目は本研究では用いなかった。

調査協力者

関西地方の大学において心理学関係の講義を受講する学生を対象に毎週 10 回にわたり調査を行っ

た。調査は2004年4月下旬から7月下旬までの3ヶ月間を通してほぼ毎週異なる尺度を用いて行われた。すべての調査に参加した有効回答者数は男性154名(平均年齢は19.56歳; $SD=1.14$), 女性79名(平均年齢は19.91歳; $SD=2.83$)の計233名であった。データの照合と管理は学籍番号により行った。

調査内容

調査は集団形式で実施し、各回2~3尺度を記載した冊子を講義時間内に一斉に配布し、個別に回収を行った。回答所要時間は20~25分であった。回収後、調査内容について解説を行った。

調査では、ENDCOREs(各項目についてかなり得意・得意・やや得意・ふつう・やや苦手・苦手・かなり苦手の7件法)に加えて、並存妥当性を検証するために、KJ法で使用した既存のスキル尺度(Table 1)についても併せて調査を行った。使用尺度は、PEAおよびPDA(Perceived Encoding/Decoding Abilities; Zuckerman & Larrance, 1979; 日本語版として益谷・佐藤, 1989を使用; 32項目5件法), ACT(Affective Communication Test; Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo, 1980; 日本語版として大坊, 1991を使用; 13項目9件法), ENDE2(堀毛, 1994a; 15項目5件法), SSI(Social Skills Inventory; Riggio, 1986, 日本語版として榎野, 1988を使用²⁾; 90項目5件法), ICQ(Interpersonal Competence Questionnaire; Buhrmester, Furman, Wittenberg, & Reis, 1988; 日本語版として和田, 1992を使用²⁾; 25項目5件法), KiSS18(Kikuchi's Social Skill Scale 18項目版; 菊池, 1988; 18項目5件法), JICS(Japanese Interpersonal Communication Competence; Takai & Ota, 1994; 22項目5件法), 改訂版セルフ・モニタリング尺度(Lennox & Wolf, 1984; 日本語版として石原・水野, 1992を使用; 13項目6件法)であった。

2) 日本語版とオリジナルでは因子が一部異なる。

併せて、コミュニケーション・スキルとパーソナリティとの関連性を調べるために、性格特性を測定する国際的な検査のひとつであるMPI(Maudsley Personality Inventory; MPI研究会編, 1969; 外向性・神経症的傾向に関する48項目3件法)を用いた。また、他者と適切なコミュニケーションを行うためには安定した自己を持っていることが重要である。そこで、自己肯定感を測定する自尊感情尺度(Janis & Field, 1959; 日本語版として井上, 1997を使用; 劣等感・自己価値・対人不安・評価懸念に関する23項目5件法)を用いた。

コミュニケーション・スキルは会話場面における行動と密接に関連した個人特性である。したがって、尺度の妥当性を検証する上で、会話場面における実際の行動との関連性について検討する必要がある。しかしながら、調査であるため行動指標を得ることはできない。そこで、コミュニケーションに関する行動傾向を測定する尺度を用いた。会話は話し手と聞き手により成立している。そして会話行動は話すことと聞くことからなる。投げ掛けと受け取りはコミュニケーションの基礎といえよう。そこでこの対人コミュニケーションの2大要素に関する主張性と反応性を測定する社会的コミュニケーション指向性尺度(Socio Communication Orientation Measure, 以下SCOM; McCroskey & Richmond, 1996³⁾; 主張性・反応性に関する20項目7件法)を用いた。また、議論性についても調査を行った。議論性は自分の意見や立場を表明または弁護すること、および相手の意見や立場を攻撃する傾向を意味する(Infante & Rancer, 1982, 1996)。議論性が高い者は積極的に議論に参加し、攻撃的な議論スタイルをとる。た

3) 日本語化は、第1執筆者が原文の意図を残すことを第一に、日本語としての適切さや回答者の理解しやすさを配慮して行い、それを英語圏での留学経験のある研究協力者がチェックするという手続きを取った。意見の分かれた項目については、話し合いにより決定した。

Table 3 ENDCOREs の平均値と標準偏差およびデータの分布

(n=233)

	M	SD	データの分布						
			1.00-1.50	1.51-2.50	2.51-3.50	3.51-4.50	4.51-5.50	5.51-6.50	6.51-7.00
自己統制*	4.80	0.95	1	2	21	71	89	47	2
表現力	4.32	1.37	8	18	45	56	66	29	11
解読力	4.97	1.20	4	6	20	46	85	56	16
自己主張	4.15	1.24	8	17	48	76	58	23	3
他者受容	5.34	0.97	0	4	6	36	93	69	25
関係調整	4.99	1.03	2	2	16	61	89	52	11

注. *男女で平均値に有意差あり。データの分布の数値は、各区間に属する回答者の数を表す。

だし、ある発言に対して、それを発した者を非難する言語的攻撃性とは異なる。議論性は発言内容に向けられた建設的な意見であり、意見の衝突をうまく処理し人間関係を良好な状態に維持することに貢献する (Infante, 1987)。議論性尺度 (Infante & Rancer, 1982³⁾; 接近・回避に関する 20 項目 5 件法) はこの議論性を測定するものである。併せて、討議中の主導的な会話行動について、どの程度積極的に課題達成および集団関係の維持に関する行動を取るのかを測定する討議集団における PM 機能評定尺度 (三隅・関・篠原, 1969⁴⁾; 課題促進・関係調整に関する 10 項目 5 件法) を使用した。

結果と考察

ENDCOREs の内部構造

ENDCOREs の 6 因子を構成する項目の信頼性について検討を行った。その結果、自己統制でやや低い値を示した ($\alpha=.68$)。そこで自己統制のサブスキルについて、各項目とその項目を除いた 3 項目の合計値との相関係数を調べた。その結果、期待応諾と他の 3 項目の合計値との相関係数は、他の組み合わせの相関係数が .47 以上であるのに比

べると .32 と低かった。周囲の期待や社会通念といった外的基準に沿った行動は、欲求や感情のコントロールとは多少性質が異なるということになる。ただし、自己統制は「コミュニケーションを円滑に行うために我を抑え周りに合わせる」ものとして定義することができることから、サブスキルも自制と協調の両側面が必要である。そこで、協調に関する期待応諾を残した。自己統制以外のスキルについてはすべて高い α 係数を示した (表現力 $\alpha=.89$; 解読力 $\alpha=.93$; 自己主張 $\alpha=.84$; 他者受容 $\alpha=.84$; 関係調整 $\alpha=.82$)。以降、自己統制の内的整合性に一定の留保が必要ではあるものの、ENDCORE モデルでは因子間の関連性を問題としていることから、各メインスキルを構成する 4 種類のサブスキルの得点を平均値化したものをスキル得点とし、分析の指標として用いた (Table 3)。

ENDCORE および ENDCOREs の項目はメインスキルまたはサブスキルの内容について直接的に問うものである。そのため回答者が社会的に望ましいと考える評定を行うことが懸念される。しかしながら、少なくとも今回の調査では、基本統計量やデータの分布から判断して (Table 3), 回答者がこちらの質問意図を察し恣意的に望ましいと思われる評定をした事実は確認されなかった。

はじめに、男女でスキル得点に違いがあるかどうかについて検討を行った結果、自己統制におい

4) 本来他者評定によって測定するこの尺度を、本研究では自分の普段の討議行動について評定するように項目表現を一部変更した。

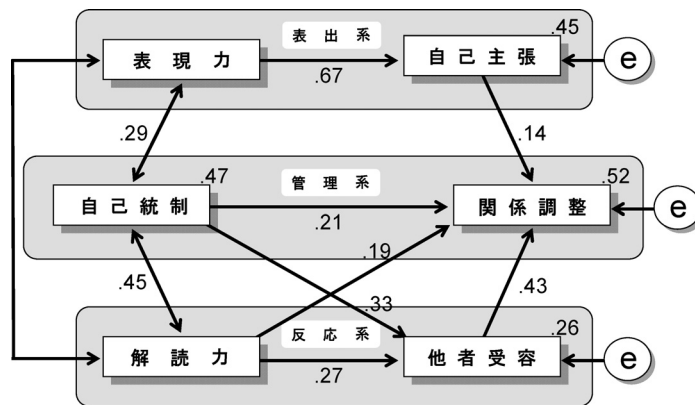


Figure 2 ENDCOREs の共分散構造分析の結果

てのみ有意な差が見られた（男性 4.92，女性 4.58； $t(231)=2.60, p<.01$ ）。そこで自己統制の下位概念について個別に検討したところ，感情統制（男性 4.95，女性 4.37； $t(231)=3.14, p<.01$ ）と道徳観念（男性 5.40，女性 4.96； $t(231)=2.59, p<.01$ ）で有意差が確認された。男性は女性に比べて感情を制御し，行動の善悪を判断基準にするということになる。それ以外のスキルでは性差は確認されなかった。言語能力や対人行動に関するスキルでは，男女で大差がないことから，以降の分析では男女を併せたデータについて分析を行うことにした。男女を併せたスキル得点を見ると，現在の日本人大学生は，平均して表出系（表現力・自己主張）よりも反応系（解読力・他者受容）のスキルに優れており，また自己統制や関係調整といったスキルもわずかながら高いという認知を持っていることが分かる。

つぎに，既存尺度の因子を分類・整理し，階層構造として統合した ENDCORE モデル (Figure 2) とその考え方，そしてそこから演繹的に作成した尺度 (Table 2) の妥当性を検証するために，共分散構造分析を行った。分析の結果，主な適合度指標はいずれも高い適合度を示している ($GFI=.980, AGFI=.916, CFI=.981, RMSEA=.090$)。スキル間に一切の関連性を仮定しない独立モデルの適合度が

低いことから ($GFI=.505, AGFI=.307, CFI=.000, RMSEA=.378$)，この階層構造を持つモデルの妥当性が確認されたことになる。

既存のスキル尺度との関連

KJ 法で用いた国内外のスキル尺度 8 種類を取り上げ，ENDCOREs の並存妥当性について検討を行った (Table 4)。その結果，ENDCOREs を構成する各因子はそれぞれ内容的に対応する既存因子と関連していた。対人スキルが SSI の社会的な能力や ICQ，KiSS18 といった対人行動に関する因子とのみ関連し，PEA・PDA や ACT (ACT は自己主張を除く)，ENDE2 といった基礎的な能力とは関連しないという偏りが見られたのに対して，基本スキルは基礎的な能力に加え，対人行動に関する因子とも関連性を示した。このように，既存因子に含まれる因子全般と関連を示した基本スキルは，すべてのコミュニケーション行動の基盤となる因子であるのに対し，対人関係に関する因子とのみ選択的に関連していた対人スキルは相互作用に関する上位の能力であることが分かる。

また，複合的な能力であるセルフ・モニタリングの 2 因子や，ICQ の関係維持といった因子については，ENDCOREs の 6 因子すべてが関連性を示し，総合的なソーシャル・スキルである KiSS18 や社会的コントロールに関する諸因子についても，

Table 4 ENDCOREs と関連尺度の相関分析の結果

コミュニケーション・スキル		基本スキル			対人スキル		
		自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容	関係調整
PEA	記号化	.03	.32	.11	.18	.18	.17
PDA	解読	.21	.32	.46	.30	.15	.26
ACT	非言語的表出性	.17	.55	.33	.50	.14	.15
ENDE2	統制	.32	-.13	.09	-.10	.19	.22
	解読	.31	.36	.57	.34	.21	.29
	記号化	.21	.61	.35	.55	.16	.24
SSI*	情緒的表現性	-.08	.28	.10	.23	.02	.01
	情緒的感受性	.26	.34	.48	.35	.20	.32
	情緒的コントロール	.27	-.02	.09	.03	.14	.16
	社会的表現性	.18	.44	.20	.46	.20	.24
	社会的感受性	-.01	-.04	.05	-.13	.21	.17
	社会的コントロール	.31	.46	.38	.54	.17	.31
ICQ*	関係開始	.02	.31	.17	.33	.10	.13
	関係維持	.32	.48	.41	.48	.38	.38
	拒否	-.18	.08	-.01	.18	-.23	-.09
	衝突回避	.35	.22	.34	.28	.33	.27
KISS18	KISS18 合計点	.38	.56	.45	.57	.19	.36
JICS	察知能力	.31	.22	.54	.22	.25	.31
	自己抑制	.41	.04	.12	.04	.28	.35
	曖昧さ耐性の無さ	-.08	.22	-.02	.22	-.19	-.03
	上下関係管理	.32	.19	.28	.22	.16	.28
	対人感受性	.22	.44	.34	.29	.14	.21
改訂版セルフ・ モニタリング尺度	他者行動感受性	.39	.49	.75	.47	.34	.49
	自己呈示変容能力	.56	.36	.47	.38	.40	.46
自尊感情尺度	劣等感	-.20	-.23	-.12	-.27	-.04	-.12
	自己価値	.24	.37	.33	.39	.08	.25
	対人不安	-.18	-.31	-.12	-.29	-.03	-.13
	評価懸念	-.13	-.11	-.07	-.22	.07	.03

注. * 日本語版はオリジナルと一部因子が異なる。相関係数 .13 以上および -.13 以下が .05 水準で有意 ($n=233$)。太字の相関係数は .30 以上または -.30 以下を表す。

他者受容を除く 5 因子が関連していた。併せて、自尊感情との関連性について検討した結果、自己価値が高く、かつ対人不安の少ない人ほど表出系のスキルが優れていることが明らかとなった。

以上、ENDCOREs の並存的妥当性、そして基本スキルと対人スキルとの間の質的な違いが確認された。ENDCOREs は複数の既存尺度において抽出された諸因子を整理・統合したものであり、多様なコミュニケーション・スキルを包括的に測定す

る尺度であるといえる。

性格特性との関連

性格を測定する MPI については、分散分析により詳細な検討を試みた。性格特性の組み合わせによってコミュニケーション・スキルに差が見られるのかを検討するために、外向性と神経症的傾向を独立変数とした 3×3 の 2 要因分散分析を、メインスキルごとに行った（外向性平均 1.34, $SD=0.91$; 神経症的傾向平均 1.36, $SD=0.91$; 平均値

Table 5 性格特性を独立変数, スキル得点を従属変数とする分散分析の結果

<i>F</i>	基本スキル							対人スキル					
	自己統制			表現力		解読力		自己主張		他者受容		関係調整	
外向性	1.16			22.23**		3.72*		22.78**		2.73 [†]		4.24*	
神経症の傾向	14.73**			0.54		2.63 [†]		1.12		2.83 [†]		6.45**	
交互作用	1.09			1.26		0.76		2.08 [†]		0.27		0.48	
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
外向性													
高 群	74	4.97	1.08	5.03 ^a	1.31	5.21 ^a	1.31	4.80 ^a	1.24	5.52 ^a	1.02	5.20 ^a	1.04
中 群	85	4.71	0.78	4.39 ^b	1.11	5.05	0.93	4.19 ^b	0.93	5.36	0.78	5.08 ^a	0.81
低 群	74	4.75	0.98	3.53 ^c	1.32	4.63 ^b	1.32	3.46 ^c	1.21	5.12 ^b	1.09	4.67 ^b	1.18
神経症の傾向													
高 群	77	4.40 ^a	1.08	4.06	1.43	4.69 ^a	1.38	3.87	1.44	5.12 ^a	1.15	4.62 ^a	1.22
中 群	80	4.83 ^b	0.78	4.36	1.29	5.13 ^b	0.98	4.23	1.13	5.51 ^b	0.80	5.21 ^b	0.85
低 群	76	5.19 ^c	0.98	4.55	1.39	5.08	1.21	4.35	1.09	5.38	0.91	5.13 ^b	0.92

注. 平均値に添えたアルファベットは, 異なる文字の群間で差があることを意味する。

[†] $p<.10$; * $p<.05$; ** $p<.01$

±0.5SDを基準に高・中・低の3群に分けた)。その結果 (Table 5), 表出系の表現力および自己主張は, ともに外向性要因で主効果が見られた (表現力: $F(2,224)=22.23, p<.01$; 自己主張: $F(2,224)=22.78, p<.01$)。多重比較 (Tukey 法) により, 外向性の高い人ほど表現力および自己主張が高かった。

反応系については, 解読力が外向性要因において有意な主効果を示した (外向性 $F(2,224)=3.72, p<.05$)。多重比較 (Tukey 法) の結果, 外向性の高い人の方が低い人よりも解読力が高かった。

管理系の基本スキルである自己統制については, 神経症的傾向要因で主効果が確認された ($F(2,224)=14.73, p<.01$)。多重比較 (Tukey 法) により, 神経症的傾向の低い人ほど自己統制が高かった。一方, 対人スキルである関係調整については, 外向性要因および神経症的傾向要因で有意な主効果が見られた (外向性 $F(2,224)=4.24, p<.05$; 神経症的傾向 $F(2,224)=6.45, p<.01$)。多重比較の結果 (Tukey 法), 外向性では低い人よりも中程度以上の人の方が, 逆に神経症的傾向では高い人よりも中程度以下の人の方が, それぞれ関

係調整の得点が高かった。

これらの結果から, 性格特性とコミュニケーション・スキルは深く関連しており, 総合的に見ると, 外向性が高く神経症的傾向の低い人ほどコミュニケーション・スキルが優れているということになる。特に自己統制を除く全てが外向性と関連していたことから, コミュニケーション・スキルの多くは社会的な活動性を反映していると考えられる。一方, 神経症的傾向については, 管理系のスキルで強い関連性が, 反応系のスキルにおいて弱い関連性が, それぞれ確認されている。したがって, これら4スキルは精神的な安定性という点で類似しているのではないかと推察される。その中でも外向性との関連性を示さなかった自己統制は, 精神性など内面的な要因と関係の深いスキルであると考えられる。以上, 性格特性との関連性の分析から, 6種類のスキルの差異が確認された。特に神経症的傾向との関連性の違いは, 強く関連している管理系, 弱く関連している反応系, 関連を示さない表出系というように, 系列の存在を示唆しているといえよう。

Table 6 ENDCOREs を説明変数、会話行動傾向を目的変数とする重回帰分析の結果

		基本スキル			対人スキル			R^2
		自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容	関係調整	
SCOM	主張性		.15*	.13*	.49**	-.30**		.42**
	反応性	.10†		.17**		.29**	.38**	.61**
議論性	接近				.54**	-.12†	.19**	.37**
	回避		.15†		-.47**			.15**
討議場面における リーダーシップ	課題促進	.19**		.19**	.30**			.28**
	関係調整			.12†		.29**	.23**	.29**

† $p < .10$; * $p < .05$; ** $p < .01$

コミュニケーション行動傾向への影響

話者のコミュニケーション行動傾向とコミュニケーション・スキルの影響関係を明らかにするために、ENDCOREs を構成する 6 因子を説明変数、各種行動傾向を目的変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果 (Table 6)、基本スキルに比べて、対人スキルがコミュニケーション行動傾向と高い関連を示した。行動傾向に関する指標も、これまでの結果を反復するものであった。したがって、コミュニケーション・スキルの中でも対人スキルは、自己レベルの基本スキルに対して、コミュニケーション行動に影響を及ぼす上位のスキルであるということになる。

総合論議

ENDCORE という体系

本調査の結果から、コミュニケーション・スキルが階層構造を持ち、基本スキルは対人スキルの下支えとなっていること、そしてコミュニケーション行動に関する指標が、対人スキルと選択的に関連していることが明らかとなった。これらの結果は、コミュニケーション・スキルを階層構造に位置づけることで包括的な定義とモデリングを行った ENDCORE モデルの考え方を支持するものであると考えられる。ENDCOREs の 6 因子について、尺度レベルでの関連性が見られたことから、実際の会話場面におけるコミュニケーション行動との

関連も十分に予想される。

階層構造を持つ ENDCORE モデルをさらにスキルの 3 分類に組み入れて考えると、コミュニケーション・スキルがスキルの基礎となり、それはまた基本スキルと対人スキルに分かれる。そしてその上位に、対象とする行動の多様性や、文化や社会といった状況に対する特殊性により区分される社会的スキルと戦略が位置することになる。以上、セルフと関連の深い自己統制を要に、状況の数だけ存在する戦略に広がる形状はまさに“スキルの扇”といえよう (Figure 1)。

コミュニケーション・スキルに関する汎用型尺度

これまでスキルについて数多くの尺度が作成されているが、いずれも特定のスキルを測定するものであったり、状況を限定したものであった。本研究において作成された尺度は、コミュニケーション・スキルからソーシャル・スキルにわたる既存の尺度を構成する諸因子を 6 種類のカテゴリーに分類し、階層と系列によって統合するというメタ的な手法により作成された。カテゴリーと対応する単一項目からなる ENDCORE は簡易版であり、他の尺度との併用や実験場面での使用などを考えた実用面を重視した尺度である。ただし、1 カテゴリーにつき 1 項目という脆弱性の問題が残るため、ENDCOREs では、1 因子につき 4 つの下位概念を想定し、それらに対応する項目を用意している。こちらは個人のより詳細なスキルを系

統立てて検討することができる。

また、ENDCORE 及び ENDCOREs は、項目文に特定の状況を想定させるものや、ある文化に特有の内容を含んでおらず、文化や状況に対して汎用的な尺度である。そのため、共通の尺度で文化間比較ができたり、調査によって状況を自由に設定することで状況に依存したスキル得点を調べることができるなど、幅広い分野への活用が期待される。

最後に

今回の結果は、調査対象が大学生に限られている。大学生は一般的に社会的経験が社会人よりも乏しく、また、回答に際しては、学校生活におけるコミュニケーションを想定していることが十分に考えられる。さらに、サンプル数も233人と必ずしも多くはない。したがって、その一般性については一定の留保が必要である。本研究の結果について、今後、調査対象者を拡充するなど妥当性の更なる検証を進めるとともに、実際のコミュニケーション行動との関連性についても追証していきたい。

引用文献

- 相川 充 (2000). 人づきあいの技術——社会的スキルの心理学——サイエンス社
- Buhrmester, D., Furman, W., Wittenberg, M. T., & Reis, H. T. (1988). Five domains of interpersonal competence in peer relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 991-1008.
- 大坊郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定：ACT 尺度の構成 北星学園大学文学部北星論集, **28**, 1-12.
- Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. (1980). Understanding and assessing nonverbal expressiveness: The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 333-351.
- Goldberg, L. R. (1992). The development of markers for the big-five factor structure. *Psychological Assessment*, **4**, 26-42.
- Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., & Klein, P. (1986). The adolescent: Social skill training through structured learning. In G. Cartledge, & J. F. Milburn (Eds.), *Teaching social skills to children*. Oxford: Pergamon Press. pp. 303-336.
- 後藤 学・大坊郁夫 (2003). 大学生はどんな対人場面が苦手、得意か？ 日本グループ・ダイナミックス学会第50回大会発表論文集, 102-103.
- Gudykunst, W. B., & Kim, Y. Y. (2003). *Communicating with strangers: An approach to intercultural communication*. 4th ed. New York: McGraw-Hill.
- 堀毛一也 (1994a). 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, **34**, 116-128.
- 堀毛一也 (1994b). 人あたりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也(編著)社会的スキルの心理学 川島書店 pp. 168-176.
- Infante, D. A. (1987). Aggressiveness. In J. C. McCroskey, & J. A. Daly (Eds.), *Personality and interpersonal communication*. Newbury Park: Sage. pp.157-192.
- Infante, D. A., & Rancer, A. S. (1982). A conceptualization and measure of argumentativeness. *Journal of Personality Assessment*, **46**, 72-80.
- Infante, D. A., & Rancer, A. S. (1996). Argumentativeness and verbal aggressiveness: A review of recent theory and research. In B. R. Burleson (Ed.), *Communication yearbook 19*. Thousand Oaks: Sage. pp. 319-351.
- 井上祥治 (1997). セルフ・エスティームの測定とその応用 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽(編)セルフ・エスティームの心理学：自己価値の探求 ナカニシヤ出版 pp. 26-36.
- 石原俊一・水野邦夫 (1992). 改訂セルフ・モニタリング尺度の検討 心理学研究, **63**, 47-50.
- Janis, I. L., & Field, P. B. (1959). Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland, & I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Heaven: Yale University Press. pp. 55-68.
- 樫野 潤 (1988). 社会的技能研究の統合的アプローチ (1)——SSIの信頼性と妥当性の検討—— 関西大学大学院人間科学, **31**, 1-16.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- Lennox, R. D., & Wolf, R. N. (1984). Revision of the self monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1349-1364.
- 益谷 真・佐藤直美 (1989). 感情コミュニケーションのコーディング能力——Perceived Coding Abilityにおける伝達経路・社会的望ましさ・性差の検討—— *Doshisha Psychological Review*, **36**, 26-39.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2005). 中国の若者の社会的スキルに関する研究 (2)——中国版社会的スキル尺度の構成—— 日本社会心理学会第46回大会発表論文集,

- 382-383.
- McCroskey, J. C., & Richmond, V. P. (1996). *Fundamentals of human communication: An interpersonal perspective*. Prospect Heights: Waveland Press.
- 三隅二不二・関 文恭・篠原弘章 (1969). 討論集団におけるPM機能評定尺度作成の試み 教育・社会心理学研究, **8**, 173-191.
- MPI研究会(編) (1969). 新・性格検査法——モーズレイ性格検査—— 誠信書房
- Richmond, V. P., & McCroskey, J. C. (1992). *Communication: Apprehension, avoidance, and effectiveness*. Scottsdale: Gorsuch Scarisbrick.
- Riggio, R. E. (1986). Assessment of basic social skills. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 649-660.
- Rubin, R. B., & Martin, M. M. (1994). The interpersonal communication competence scale. *Communication Research Reports*, **11**, 33-44.
- Simons, T. L., & Peterson, R. S. (2000). Task conflict and relationship conflict in top management teams: The pivotal role of intragroup trust. *Journal of Applied Psychology*, **85**, 102-111.
- 高井次郎 (1994). 対人コンピテンス研究と文化的要因 対人行動学研究, **12**, 1-10.
- Takai, J., & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **33**, 224-236.
- Trower, P. (1982). Toward a generative model of social skills: A critique and synthesis. In J. Curran, & P. Monti (Eds.), *Social skills training: A practical handbook for assessment and treatment*. New York: Guilford Press. pp. 399-427.
- 塚本三夫 (1985). コミュニケーションの論理と構造 青井和夫(監修) 佐藤 毅(編) ライブラリ社会学7 コミュニケーション社会学 サイエンス社 pp. 1-48.
- 和田 実 (1992). ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂 東京学芸大学紀要(教育科学), **43**, 145-163.
- Wiemann, J. (1977). Explication and test of a model of communicative competence. *Human Communication Research*, **3**, 195-213.
- Zuckerman, M., & Larrance, D. T. (1979). Individual differences in perceived encoding and decoding abilities In R. Rothenthal (Ed.), *Skill in nonverbal communication: Individual differences*. Cambridge: Oelgeschlager, Gunn & Hain. pp. 171-203.
- 2005.11.7 受稿, 2006.12.17 受理—

ENDCORE: A Hierarchical Structure Theory of Communication Skills

Manabu FUJIMOTO and Ikuo DAIBO

Graduate School of Human Sciences, Osaka University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 15, No. 3, 347-361

We attempted to integrate various factors of communication skills into a hierarchical structure model. By classification, we found six categories of factors: Expressivity, Assertiveness, Decipherer ability, Other Acceptance, Self control, and Regulation of Interpersonal Relationship, from various existing scales. We hypothesized that the six factors were located at the basic or interpersonal level, and could be combined to form higher-level factors of three: the encode, decode, and management systems, respectively. Thus, we proposed ENDCORE theory to integrate various factors of communication skills into a hierarchical structure. College students, 233 in all, participated in the study, and completed a number of scales. Results indicated high utility of the hierarchical structure model, and we have developed ENDCORES, a scale of 24 items to measure four sub-skills each for the six main-skill factors.

Key words: ENDCORE model, communication skills, hierarchical structure, scale development